

専門支援チーム撤退が もたらす新たな力

復興へ向かう陸前高田市の今 (第七報)



日本赤十字秋田看護大学

佐々木亮平

(ささき・りょうへい) 看護学部 助教

連絡先

〒010-1493
秋田県秋田市
上北手猿田字苗代沢 17-3
018-829-4125
ryohei-s@rcakita.ac.jp

I はじめに

東日本大震災発災後7カ月が経過し、岩手県陸前高田市(以下、市内または現地)の報告も7回目となりました。今回は、現地で初めて開催される合同慰霊祭(平成23年10月22日)直前となる9月20日以降、現在(10月13日)までの1カ月間の状況をご報告いたします。

現地では朝晩の冷え込みと日中との温度差の激しさが増し、三陸のリアス式海岸に伸びる山々も赤や黄色に色づき始めました。駆け足でやってくる東北の冬の前に、毎日ほんの少しずつでも確実に変わっていく四季の移ろいが、復興の進み具合や現地内外の人々の思いの変化と重ねて見えてきます。

この原稿が皆さまのお手元に届くころには、秋田県で行われる第70回日本公衆衛生学会も終わり、今回の震災にだけ効率的・効果的にケアの提供ができるようになる」ことを目指しているものでした。そして同時に、そのときのフェーズに合わせた活動の確認だけでなく「②中長期的な視点で地域全体を俯瞰し、復興のためのデザイン(計画・未来図)を議論する場にする」ということもネライとしていました。

しかし実際には、現在の関係機関の動きの確認が精いっぱい、中長期的な議論をするというところは理想論、つまり現場の動きに必ずしもマッチしていかない……という状況が起きていました。この会議が集まる関係者にとつては、市外からの支援チームを含め、「今」は実際にどうなっていて、自分は何をすればよいのか」という「今月」の活動に生かせる短中期的な情報交換・共有を求めていることが多かったように思います。もちろん、長期的な視点で見てくださいる支援チームも数多くありましたが、現場の状況がそれを許して

かかる多方面の皆さまによる議論や意見交換が行われたことと思います。こういった繰り返し議論の積み重ねが、とても地道なことではあるのですが、自分一人では気がつかなかつたことを気づかせ、その思いを共有することで全体の力になっていくように思います。一方で、被災地はまだこの原稿さえも読む余裕がない状況であることも忘れてはなりません。

現地の10月12日(被災から215日目)現在の死者は1554人、行方不明者は374人(うち死亡届受理者252人、67・4%)となり、ここ数カ月大きな変化はなくなってきたのですが、時間の経過とともにこれまでの議論・意見交換の積み重ねが、刻々と変わるフェーズと現地のニーズに対応していくための準備につながっていると実感しています。

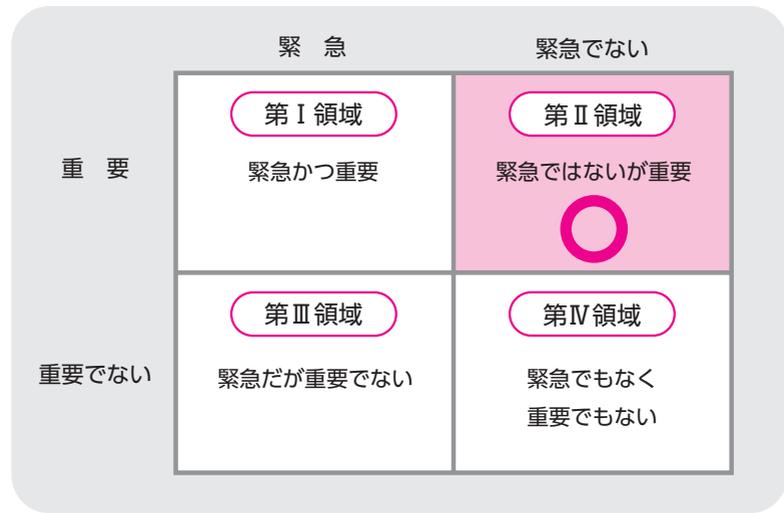
今回はこれまで、重要度も緊急度も整理がされないまま、とにかく目の前

のことに向き合い対応せざるを得なかった状況から、引き続きまったく落ち着いてはいないものの、少し先を見据え、住民や保健医療福祉関係者以外を巻き込んだ議論ができるような雰囲気になってきた様子についてお伝えいたします。

II 包括ケア会議の内容が変わった

震災後3月末から2週間に1回、6月以降は月1回のペースで開催してきた市内外の保健医療福祉関係者による包括ケア会議も、10月13日で13回目となりました。これまでも、この会議の内容については公衆衛生ねっと1)のホームページ上で、その概略をお知らせしてきたところです。この会議の大きな目的は「①広域的かつ複合的な災害となっている今回の震災からの復興・復興に向け、市内外の関係者によるお互いの活動状況を共有し、できる

図1 月1回の包括ケア会議で目指す領域



はくれませんでした。私自身、平成16年の新潟県中越地震における支援チームとして現地に入った際の振り返ると、1年後や5年後の議論のための情報よりも、自分が活動を行うその1週間のために必要な情報ばかりを集め、動いていたような気がいたします。現地も精いっぱい、現地に入る支援者も精いっぱい、もちろん住民はもつと精いっぱいな状況の中で進んでいるため、目の前に重なる多くの課題に向き合い、対応せざるを得ないのが現実なのだと思います。

それでもこの半年あまりの間、じっくり耳うるさいくらい前述した②について問題提起をし続けてきました。そういう役割が週1回入る私や月1回入る岩室紳也先生にはあり、現地にはできないことを形にしていくな支援の一つとして重要であると考えていたからです。そうして迎えた13回目(10月13日)の包括ケア会議は、これまでと雰囲気

が明らかに変わり(自己満足かも知れませんが)、②のことについて恐らく震災後、初めて関係者の中で率直に意見交換し、共有することができました。これにはいくつか布石があると思う

のですが、具体的な体制的な要因から考えると、やはり震災後半年がたち、多くの支援チームが撤退したことや、高田病院の仮設診療所に病床が41床整備されることが決まった(同14日)など、復旧が進んだことが挙げられます。そのことにより関係者による合同ミーティングが週1回水曜日夕方に集約化され、毎日行われていた時期と比べ、ある程度しっかりと落ち着いた雰囲気の中で、細かな地域情報まで確認・共有ができるようになりました。常に各関係機関がフレキシブルかつ主体性をもって動ける情報の中で活動できるようになったことが大きいと思います。

時間の経過とともに外部からの支援チームが撤退していき、必然的に市内

ある活動です。例えば、関係機関の根回しの協働による活動の推進や各組織内の職員の健康管理・人材育成、その他、大きくは復興計画の策定も入ってくると思います。やらなければならぬのは分かっているのですが、少し放っておいても、すぐには支障が出てこない内容です。今後の包括ケア会議は、13回目を一つのキッカケに、こういった重要だけれども緊急度が低いと思われる内容につ

外に限らず関係者が未来志向に変化してきているのかも知れません。これまでは、**図1**にあるように、重要度も緊急度も高い第Ⅰ領域の活動はもちろん、重要度は判断しにくく、でも緊急度の高い第Ⅲ領域の内容に翻弄され続けてきたと思います。つまり、市内外のそれぞれの関係者の予定や思いとは別にさまざまなことが目の前で起き、課題として積み上がっていくため、とにかくやるしかない状況となり、結果として第Ⅲ領域の部分にも多くのエネルギーを取られざるを得なかったと考えます。

しかし、難しいことはありませんが、本来ならば緊急度は低いが高重要度の高い第Ⅱ領域について取り組んでいかなければ、全体が回らなくなることは皆さまま経験的にご承知のとおりだと思います。この部分は、誰かが意識して進めなければ緊急度は低いためにそのまま放置され、動かなくなるおそれが

いて主に協議する場とし、週1回の合同ミーティングでの活動状況の確認・共有との役割分担・差別化を図って進めていきたいと考えています。

Ⅲ ハイリスク者の洗い出しが最終目的ではない

現在、11月に家庭訪問による2回目の悉皆調査を計画していることは先月号でも触れましたが、限られた時間とマンパワーの中で、当初の「もう一度、全戸訪問する」という計画から、個人宅避難者を重点対象者に絞らざるを得ない状況へと変わってきています。ここでさまざまなシレンマが起きるので、最終的に何を目的とするか現地でも議論を続けています。

春の1回目の際は、安否確認と要フォロー者のピックアップと、訪問して話を聴くこと自体が心のケアになるということを大きな目的としていまし

た。早期発見・早期治療という2次予防的な健診（検診）の発想だけでは地域の健康を守り・創ることはならないように、今回だけではなく今後も定期的に訪問による悉皆調査を行い、本来の目的である心のケアをし続ける必要があると考えています。

前述した包括ケア会議でも、県立高田病院の石木幹人院長や心のケアチームの精神科の先生の発言をキツカケに、悉皆調査という手段と並行する形で「本人のやりがい、生きがいを引き出す」方法や「自分が生きていることを実感できる」時間をいかに生活の中に持てるか、さまざまな形や手段でつくり、つながり続けていくといった部分へ支援できる内容も考えていくことが重要と確認されました。ハイリスク者を掘り起こし、医療機関につなげることは、これはこれで非常に重要なことではありますが、それですべてが解決するわけではありません。平常時の

健康づくりでもQOLの向上や生きがいづくりが大切だと言われ続けていますが、今回、現地での議論の中からの考えが出てきたことは大変貴重なことだと考えています。

IV 住民との連携・協働が不可欠な時期に

包括ケア会議もいわゆる保健医療福祉関係者だけで議論し、検討していくことに行き詰まり感を持ち始めていたところもありました。その原因としては、肝心の住民の意見や実際の活動が十分に反映されていないことがまずあると思います。住民のためであるはずの議論も、どこか関係者だけ、関係者の中で解決しようとしている節がありました。もちろん、何でもかんでも最初から最後まで住民の皆さんとともに議論し、進めることは不可能ですが、そのことを意識に持ち続け、できるだけ具体化していくことが必要です。

受けた地域においては「重要」と言っているレベルではなく、もうどうしても住民の力が、そして住民との協働が「必要・不可欠」な状況になっていると思います。そのことを住民の皆さんも気がついており、自分たちでできることをできる人から行動に移しています。

具体的な事例を紹介します。以前もご紹介した健康運動サークル「たかた☆ハッピー♪ウエーヴ！」の皆さんは、社会福祉協議会が仮設住宅単位で行っているサロン事業と協働して玄米ニギニギ体操を通して仮設住宅の方々との交流を図り、単に運動ではなく、あの日の大津波の経験など、被災者同士だからこそサラッと、時には笑いながら話をされています（図2）。その様子を拝見し、「専門家や関係者でないこと」が大切だと思えました。子育て支援ボランティアとして震災前から活動していたおやこの広場「きらりんきつ

ず」²⁾の皆さんは多くの市民、関係者の皆さんと協働し、「地域子育て創生事業実行委員会」を組織し、子育て支援イベント「たがだのわらしBa」³⁾を継続的に行っておられます。イベントや事業というと、なんだかイベント



図2 仮設住宅でのたかた☆ハッピー♪ウエーヴ！の玄米ニギニギ体操

実際、既に多くの住民の皆さんが、いわゆる保健医療福祉関係者の動きと連動しながら、もしくは独立して復旧・復興に向けた活動を展開されています。そのような住民による活動ともしっかりと連携し、協働して進めていくことが、これから復興に向けて一つの大きなキーワードになると思います。

震災前から住民との協働については、全国どこでも重要であると言われる続け、そうあるべき、そうしないといけないという認識だったと思います。しかし、実際には重要であつても進めることは難しく、なかなか具体的な活動となつていなかったのが現実だと思えます。

今回、震災が起きたことで、住民との協働は「重要」から「必要・不可欠」になつたと考えています。もちろん、震災が起きても重要であることには変わりはないのですが、行政機能を含め、ありとあらゆる機関が壊滅的な被害を蒙り、事業ありきのように聞こえてしまうかも知れませんが、イベントや事業実施が目的ではなく、イベントや事業をつくり上げることを通して、真に現地の一住民として、同じ被災者の立場だからこそできることをさまざまな機関と連携しながら進められています。

こういった活動は、失礼な言い方になるかも知れませんが、専門家にも市外からの多くの支援チームにもできないことであり、一つひとつのイベントや事業が、実施する側にも参加する側にも心のケアにつながっているように思います。

週1回の関係者合同ミーティングには「たかた☆ハッピー♪ウエーヴ！」の皆さんにも出席していただきましたが、今後は包括ケア会議にも、住民同士で活動をされている方々や、いわゆる保健医療福祉関係者以外の分野の皆さんも参加していただき、より幅広く



図3 子育て支援イベントのポスター

議論ができるよう進めていきたいと思っています。

V 今後広がるであろうさまざまな格差

仮設住宅の建設・入居が宮城県や福

島県と比べて早く、生活が落ち着いてきていると思われる岩手県ですが、住居が確保されても、おそらく陸前高田市に限らず、さまざまな「格差」の問題が起きてきていると思います。まず、根本的な①仮設住宅のコ

体が被災者であることを忘れてはなりません。②は集会場の建設の有無や、生活の利便性など、数的な規模や立地により偏りが生まれてしまっています。限られた土地の利用のためではありませんが、やはり地域の実情に合わせ

たきめ細かな支援が求められます。③は「仕事があるかないか」でも大きな違いが生まれるだけでなく、1年後、2年後となったときに、自宅の再建ができる住民とそうでない住民など、今よりも格差が顕著になり、その時期にこそ心のケアが重要になるだろうという声が包括ケア会議で出されるなど、現地では危機感が高まっています。こういった格差そのものを是正することはなかなか難しいのが現実ですが、これこそ、中長期的な視点をもつてかわり続けることが重要な内容の一つだと思います。

VI 改訂版「未来図」に向けて

現地では11月をメドに市の復興計画が策定されていますが、今回策定される震災復興計画はハード面の整備と復興に向けた方向性が示されています。しかし、協働の具体的なあり方、

コミュニティの再生といったソフト面については不十分なため、これまでもこの部分を皆さんと共有してきた「陸前高田市保健医療福祉未来図(復興計画)くたいてちょう台」¹⁾が、行政だけでなく市民や関係機関と共有できる実施計画として重要性がますます高まっています。そのためにも関係者だけでなく住民の皆さんの声が必要不可欠であることは言うまでもありません。

先日、市内で震災直後からボランティアで活動を続けていただいている健康運動指導士の藤野恵美先生が「こ(未来図)に、『みんなで運動』と書いてあったから、市民の皆さんと協働して運動を実践してきた」と教えてくださいました。これこそ、デザイン(計画・未来図)の重要性だと思ひ、とてもうれしくなりました。やはり、それぞれが、それぞれでただ頑張るのではなく、私たちはどこへ向かうの

か、何をしようとしているのか、みんなで一緒に議論しながら創り上げていくことの大切さを実感しています。最初の悉皆調査後も、仮設住宅入居者に対する訪問調査、現在岩手医科大学衆衛生学教室の坂田清美先生のご協力が始まっている特定健診に合わせた国の被災者健診(10年間コホート調査)をはじめ今後さまざまな調査や事業が行われます。それらについて、時間軸をもって整理していくためには多くの課題があります。が、引き続き、皆さんとともに進めていきたいと思ひますのでよろしくお願ひいたします。

文献・インターネットサイト

1) 公衆衛生ねっと (<http://www.koshu-eisei.net/>) 内「陸前高田市のいま」
<http://www.koshu-eisei.net/saigai/rikuzentakata.html>

2) <http://kirarinkids.org/>

3) <http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/>